モノグラフ
中学生の世界
目次
vol. 11

1982. 株式会社福武書店 教育研究所 / 加藤智禧・雨宮紀子・木村美紀子奈良教育大学教授　深谷昌志 /飯島精一・尾木直樹・田村豊・長嶋安男・半田茂雄・松永渉・山田暁生

高校進学
～揺れ動く生徒の心～

高校入試への視角

1．学校には入試がついてまわる……4
2．高校入試の社会心理的な背景……5

本報告書の要約……7

第Ⅰ章　3年生の11月

1．進路を心の中に描いて……8
2．中学3年生の生活時間……12
3．学校生活……15

第Ⅱ章　進路選択の過程

1．どの程度の高校をめざすか……20
2．どの程度の勉強が必要か……23
3．志望校を選ぶ条件……26

第Ⅲ章　受験生の心の内

1．偏差値についての感じ方……29
2．偏差値は未来を規定するか……33
3．不安感の高まり……35

第Ⅳ章　高校受験をどうしたらよいか

1．生徒たちの望む受験のあり方……41
2．若干の提案……46

付．調査票見本……48

良教育
松永渉

……4
……5

……7

……8
……12
……15

……20
……23
……26

……29
……33
……35

……41
……46

……48

高校入試への視角

1.学校には入試がついてまわる

「受験競争」は，日本の教育の特産物であるかのように語られることが多い。しかし，古今東西を問わず，学校のあるところに，受験競争の影がついてまわる。良い学校があればそこに入りたい生徒の数は，当然のことながら，定員を上回る。その結果，選抜試験が生まれ，試験に合格するために，準備教育が始まるという段取りになる。

日本を例にとっても，近代学校が制度的に確立されたのは，森有礼の学校令発布以後といわれるが，それから数年後には，一高を中心とした旧制高校の入試倍率は2倍を越え，浪人の占める割合が3～4割の事態を迎えている。また，旧制中学についても，府県立中学の入試倍率は，常に2倍を上回っている。

すでに明治30年には，受験を目的とした塾や家庭教師――教育史的に考えると，私塾の方が，公教育より先に成立していたのは確かだが，そうした論議はさておき――の姿が見受けられる。そして，明治42年を例にとると，旧制高校では，一高6.1倍，三高4.0倍など，いずれも，3倍を越える入試競争が展開されているが，同じ年，中学の入試倍率も，東京府立一中6.6倍，三中2.5倍の通りである。

しかも，県レベルの選抜試験ともいうべき中学受験，そして，ブロック選抜にも似た高校受験も，大正から昭和へと時代が移るにつれて，狭き門の度合が増すことはあれ，やさしくなることはなかった。

そうした状況に対応して，それぞれの時期に，総合選抜や内申書の重視，推薦制の採用，学区制の導入，一期・二期制の検討など現在，高校入試をめぐって検討されているさまざまな方法の実施をみている。しかし，いずれも，さしたる効果をあげえないまま，10年から15年周期で，学力のみの単純選抜から内申書や推薦を加味する複合した選抜への振幅をたどりつつ，現在を迎えている。

考えてみれば，定員以上の志望者がいる場合の選抜の仕方に，最善などというのはないのかもしれない。つまり，それぞれの方式にそれなりの弊害と長所とがあり，その中で，相対的に弊害の少ないのが何か，ベターと思われる方法を選ばざるをえないのが入試制度の宿命であろう。

さらにいえば，入試の弊害が説かれることが多いが，マクロにとらえると，家柄や居住地，性別などにより，一生を規定された時代――ヨーロッパでは，現在でも，そうした傾向が強いが――と比べれば，本人の学力により，人生を切り開けるという意味で，入試の効用を，否定する訳にはいくまい。

2. 高校入試の社会心理的な背景

昨年の暮れ，アメリカを訪ねた折，たまたま，日米の入試事情を語り合う機会があった。大学入試については，東大をハーバード大学に置き換えると，理解のできた彼らも，高校入試は，なんとも分かりにくいようであった。

進学率が95％で，しかも，結果としては，全員が進学できるのだとしたら，受験地獄は生まれるはずがないというのが，彼らの発想である。数値面から考えると，彼らのいうのが，むしろ，正論である。

端的にいって，現在の高校入試は，社会心理的な現象であろう。もう一度，明治40年代を例にあげれば，そのころ，中学志願者は該当年齢の６％で，入学者は４％，また，高等教育の進学者は，とらえ方にもよるが，ほぼ１％である。つまり，100人の中から６人が選ばれ，４人が入賞するレースのようなもので，出場者の中での競争が激しいのは確かだが，94人は見学者なので，不運にして，レースに勝ち残れなくとも，圧倒的に多数を占める見学者の仲間入りをすればよいことになる。レースに参加できただけでも，しあわせというべきであろう。

そうした構図は，大正10年代，中学進学者が３割を越え，大学進学者が３％に達した状況でも，基本的に変わりはない。

それに反し，現在の高校入試は，全員が参加して20人の内，19人が予選を通過できる。しかも，順位に応じて，賞金の額がちがうレースに似ている。だれしも，自分だけは貧乏くじを引きたくないと思うから，下位は下位なりに緊張が高まってくるが，予選落ちの心配のない中位の者も，少しでも順位をよくしたいので，そのレベルなりの競争が始まる。もちろん，トップ集団内での順位争いも激しい。という訳で，参加者全員のストレスは，不必要なまでに高まってくる。

高校入試が，こうした社会心理学的な要因に動かされているので，さまざまな改革案も，実施の段階に入ると，机上計画のレベルで想定していなかった要因が作用して，思わぬ失敗を招きやすい。その代表例が，東京都で実施された学校群制度の導入であろう。あらためてふれるまでもなく，学校群制度は公立のみを対象としていた。頑張ったところで，望みの高校へ入れるとは限らない。それならば，確実に志望校へ入学できる私立校をめざそうということで，大学付属や一部有名私立高校へ生徒が殺到する現象が現れる。小さな枠にたくさんの生徒が押し寄せるので，かえって，入試をめぐる状況は悪化してくるというあんばいである。

また，神奈川県で実施されている内申の重視も，１回のみの試験のもたらす弊害を除去するのを目的としているし，それなりに，理由も理解できるのだが，現実問題としては，中１の期末テストも内申の対象となるため，受験勉強が中１から始まり，かえって，受験勉強の慢性化を招きがちになる。

高校入試が，こうした形で，社会心理的な色あいを濃くしてくると，これといった解決策を見出しにくい感じがしてくる。

そうはいっても，中３の生徒が，偏差値52の者は53をめざし，48の生徒は49を目標に，せめて１ランク上の高校をめざして１年間を過ごす姿は，どう考えても健全といいがたい。

中学３年生といえば，思春期のまっただ中の年齢で，心の揺れ動く時期にあたる。それだけに，友情の意味をかみしめたり，スポーツに打ち込んだり，将来の生き方を思索したりして欲しい年齢である。そうした年齢の生徒たちが，感情を捨象して，勉強へ気持ちを傾斜させる。正直なところ，そうして獲得した知識は忘れやすいうえに，社会生活を送るのに必要不可欠といいがたい。さらに，多くの生徒は，高いランクの高校へ入れない自分に挫折感を味わい，運よく，望みの高校へ入れた生徒も，３年後に始まる大学入試めざして，また，新たな勉強に取り組まねばならない。

高校入試に，勝者なき――あるいは，勝者の少ない――無駄な争いを連想するのは，筆者だけであるまい。しかし，当事者である生徒たちは，そうした高校入試に，どんな気持ちで臨んでいるのか。彼らの心の内を探ってみたいと思った。高校入試が弊害をもたらすとしたら，犠牲になるのは，生徒たちなのである。以下，４章に分けて，高校受験を間近に控えた生徒たちが，どんな気持ちで毎日を送っているかについての調査結果を紹介してみたい。

たらす
のだが，
強が中

これと

徒は49
う考え

期にあ
り，将
ちが，
獲得し
。さら
，運よ
た，新

連想す
した高
いと思
なので
な気持

本報告書の要約

❶ 平日の勉強は３時間，12時ころ就寝，睡眠は７時間が，中３の標準的な生活スタイルである。（P.12　図２，P.13　図３）

❷ 今，考えている高校へ入学できたら，希望する道に進めると考えている生徒が多い。(P.17　表５)

❸ 半数近い生徒は，実力より「ちょっと上」の高校入学をめざしている。（P.21　図６）

❹ 子どもに気を使ってか，親たちは，子どもに高望みをしていないようにみえる。

❺ 学校の授業だけでは，高校へ入れないと思っている生徒が５割を占める。（P.23　図７）

❻ 塾へ通った方が受験に有利と考えている生徒も７割に達する。

❼ 大半の生徒は偏差値は頑張れば上がり，怠ければ，下がると信じている。つまり，偏差値は努力を示すバロメーターである。(P.30　図11，P.31　図12)

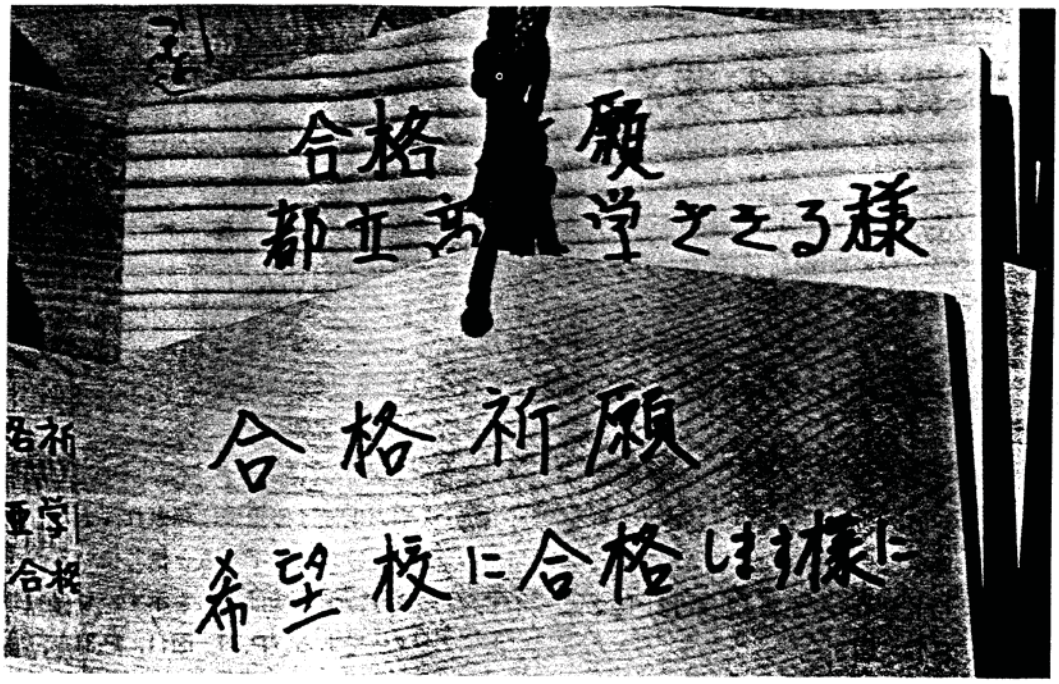
❽ 偏差値の高さは，将来の社会生活での明るさを約束すると，生徒たちは考えている。(P.34　図13)

❾ 勉強に集中できないと思っている生徒が９割に達する。(P.35　表８)

❿ 「このところ，疲れている」と感じている生徒は７割である。(P.38　図15)

⓫ 生徒たちは，本番のテストと内申書との割合は半々がよいと思っている。(P.42　図18)

⓬ 面接試験を加えることに，３分の２の生徒が反対している。(P.45　図21)



■第Ⅰ章 ■3年生の11月

1. 進路を心の中に描いて

緊張感の高まる中3の11月

東京都下のA中学では，**表2**のような流れにそって，進路指導が行われている。

もちろん，学校により，もう少し早い時期に，1回目の進路調べをする場合もあろうし，1学期末の三者面談を大事にする学校もあろう。しかし，いずれにせよ，2学期に入ると，進路指導は本番を迎え，私立高への単願や推薦などを煮つめる11月中旬ころから，ますます緊張の度合が高まってくる。以下に紹介する調査結果は，緊張感の高まるそうした時期を選んで，アンケート用紙に記入を求めたデータである。

ひとくちに，中3といっても，1年の間に心の起伏があろう。1学期では，まだ高校入試の構えができ上がっていないし，3学期では入学する高校の決まった生徒もいる。そこで，生徒全体が，高校入試に取り組み，不安や悩みの強まる時期という意味で，調査校にお願いして，11月中旬から下旬にかけて，調査を実施してもらうことにした。結果の紹介に入る前に，なにかと多忙なこの時期に，実施の手配をしていただいた先生方，そして，調査に協力してくれた生徒諸君に，感謝の気持ちを述べたいと思う。

(表1) サンプル構成　　N＝1764

性別	男子＝51.8%	女子＝48.2%
学校	A校＝181人 B校＝300人 C校＝294人	D校＝257人 E校＝398人 F校＝334人

(いずれも中学3年生)

(表2) A中学の進路指導

- 9月上旬……・5月の第1回進路調査（大まかな進路希望——進学か就職か，親子のそれに対する考えは？など——の調査）に引き続き，第2回進路調査（希望進路のアウトライン，親子の具体的対話状況の把握，担任に聞きたい進路のことなどの調査）
- 9月より……・業者テストにより毎月1回学力測定模擬テスト（1学期は期末に1度実施。校内だけでなく，校外での〝他流試合——高校入試——〟のことを考え，個々の学力状況，位置を把握し，夏休みに入るために行う）
- 10月……・進路研究のための高校訪問（生徒・父母）——夏休みに引き続き実施
  - 高校説明会——近くの公立・私立高の教師を招き，生徒・父母対象に〝わが校の教育〟を語っていただき，学習する
  - 学力測定模擬テスト
  - 2学期中間テスト（受験の際の内申成績の主要資料となる）
- 11月……・各家庭ではほぼかため始めている受験候補校の案内を取り寄せ，比較・検討開始
  - 学力測定模擬テスト
  - 私立高への単願，推薦者煮つめ作業開始，接渉
  - 個人面談(生徒対象)——内容は，現時点での学力状況と今後の見通しなどについてのアドバイス。生徒自身の希望聴取
  - 進学希望者は志望校を，就職希望者は希望職種をほぼ決定
- 12月……・初旬，2学期期末テスト（内申成績の主要資料）
  - 学力測定模擬テスト
  - 三者面談（担任—生徒—保護者)——進路決定
- 1月……・進路再確認及び最終決定　・就職試験・合否発表
- 2月……・私立入試・合否発表
- 3月……・公立入試・合否発表
  - 卒業式

それぞれの進路を心の内に

さて，結果の紹介に入ろう。まず，中学卒業後の進路選択というとき，具体的に，生徒たちは，どのような進路を考えているのであろうか。順位の多い方から，結果を示すと，以下の通りとなる。

中学卒業後の進路選択

1．高校――4年制大学……38.0%
2．高校(職業科)――就職……23.0%
3．高校(普通科)――就職……13.6%
4．高校――短大……11.7%
5．高校――専修学校……9.4%
6．高等専門学校……1.6%
7．就職……1.1%
8．定時制高校……1.0%
9．専修学校……0.6%

これを，さらに要約すれば，

高校――進学(1，4，5)……59.1%
高校――就職(2，3，6，9)…38.8%
就職(7，8)……2.1%

となる。つまり，**生徒たちのほぼ6割は，高校卒業後も進学を考え，4割は，高卒後の就職，そして，2%は，そのまま就職**という分布である。

なお，1の「高校―4年制大学」を進路に選んだ生徒を，もう少し，こかまく分析すると，

			全体中の構成比
普通高校	普通の大学	58.0%	(22.1%)
	有名な大学	24.2%	(9.2%)
有名高校	普通の大学	3.8%	(1.4%)
	有名な大学	14.0%	(5.3%)

の通りとなる。つまり，高校進学といっても，**将来，「有名な大学」へ入りたいと思っている生徒は15%程度にすぎず，半数近い生徒は，まあまあの高校に入り，それから，どこかの大学か，短大，そして，専修学校へ入学する姿を，自分の未来像として描いている。**

もちろん，こうした数値は，生徒をトータルとしてとらえた場合のことで，高校―短大のコースを考える生徒が，男子2.0%，女子22.1%のように，女子に多い。また，

	〈本人〉	〈親の希望〉
高校――4年制大学	38.0%	40.5%
職業科――就職	23.0%	22.0%

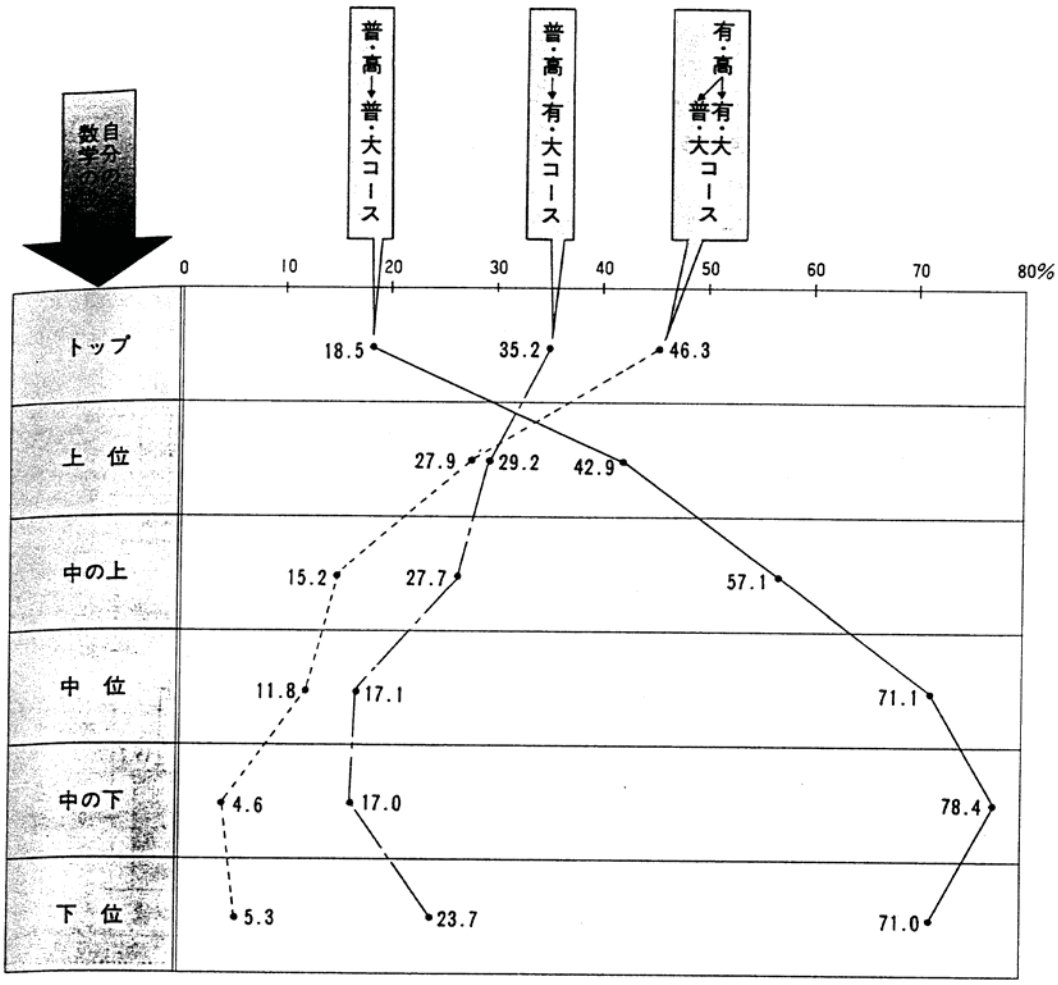
と，さすがにこの時期になると，本人の気持ちと親の考えとが，一致しているのが目につく。

なお，高校進学組の中で，進路と学業成績との関係を調べると，**図1**のような結果が得られる。当然のこととはいえ，成績が上位になるにつれて，有名な大学をめざす生徒の割合がふえ，それに反し，成績が中位以下になると，とりあえず普通の高校へ入ろうとする生徒が増加してくる。

このようにみてくると，高校進学といっても，心の内にあるものは，かならずしも同じでないことが分かる。それぞれの事情に応じて，ある者は，高校を出てから短大を，別の者は勤めるために高校へ行くなどを，進路に描いて，進路の決定する瞬間を迎えようとしているのである。

〈図1〉 いまの成績でどんなコースを考えているのか

成績により将来のコースが異なる

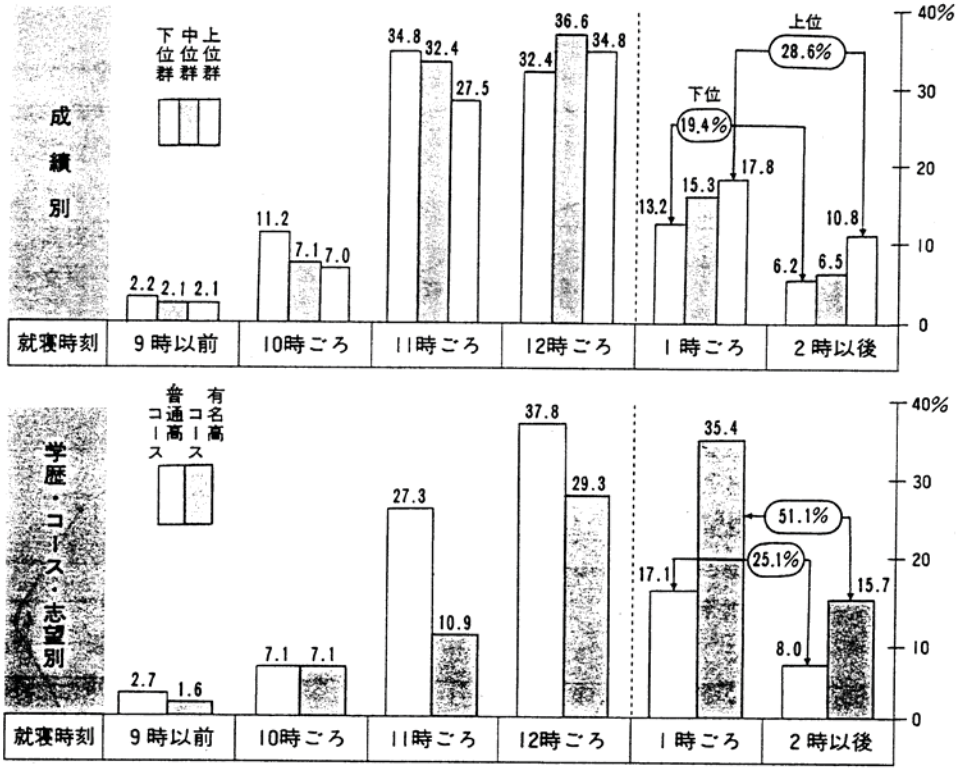


普・高 —— 普通の高校
有・高 —— 有名な高校
普・大 —— 普通の大学
有・大 —— 有名な大学

2．中学3年生の生活時間

〈図2〉就寝時間×属性

→成績に関係なく12時ごろに寝る



睡眠は平均7時間

生徒たちの心の内は，もう少し，のちにふれることとし，ここでは，入試を2～3か月後に控えた中学3年生の生活を概観しておこう。

まず，就寝の時間は，

1．9時以前……2.1%
2．10時ごろ……8.4%　} 10.5%
3．11時ごろ……32.6%
4．12時ごろ……34.8%　} 67.4%
5．1時ごろ……15.2%
6．2時以降……6.9%　} 22.1%

で，11時から12時にかけて，つまり，受験生として妥当とも思える時間に寝ている生徒が3分の2を占めている。

もっとも、図2に示したように，成績が上位で，有名高校をめざす生徒は，覚えねばな

〈図3〉睡眠時間はどうなっているか
└→平均すると7時間

		短時間タイプ				長時間タイプ		
		5時間以下	6時間	6.5時間	7時間	7.5時間	8時間	8時間以上
全体		4.8%	16.5%	12.2%	25.9%	15.1%	16.3%	9.2%
成績別	上位群（トップ，上位）	5.4	21.4	10.9	25.0	12.7	15.2	9.4
	中位群（中の上，中位）	4.9	15.9	13.6	26.6	15.9	16.0	7.1
	下位群（中の下，下位）	4.7	15.6	11.2	24.9	14.9	17.0	11.7
コース別	普通高志望	6.4	17.1	12.5	26.3	15.4	14.7	7.6
	有名高志望	6.4	23.4	8.9	23.4	10.5	16.9	10.5

らない内容が多いためなのか，深夜になっても勉強に取り組んでいる生徒が少なくない。

睡眠時間は，図3のように，平均して，7時間近くとっており，8時間以上の睡眠をとっている生徒も4分の1を占める。成績のトップ層や有名高校を受験する生徒層の中に，睡眠時間の短い者が見受けられるのが気になるが，受験生としては，やむをえない長さなのかもしれない。しかし，いずれにせよ，睡眠が5時間を割るというような眠りの少ない生徒が5％以下にとどまったのに，なんとなく安堵感を覚えた。

家庭学習の長さは3時間が境め

それでは，生徒は，勉強に，どれくらいの時間をかけているのだろうか。

全体としてみると

家庭学習時間

	（平日）	（土曜日）	（日曜日）
1時間未満	7.5%	9.3%	8.7%
1時間台	18.1%	15.2%	9.3%
2時間台	★32.5%	21.3%	16.8%
3時間台	19.1%	20.1%	15.3%
3時間半以上	22.8%	★34.1%	★49.9%

平日は2時間半，そして，土・日にかけて，3時間以上というのが，平均的な勉強時間のように思える。より厳密にいうと，平日は3時間を境めとして，それより短いと，勉強不足，それ以上だと，よく勉強をするタイプになる。

もちろん，これらの数値は，生徒たちの答

（表３）過去の生活は平日ではどうだったか
└→ このところ，勉強をする生徒がふえた

(%)

学習時間 / 時期	1時間未満	1時間	～1.5時間	～2時間	～2.5時間	～3時間	3時間以上
小学５，６年	★45.5	29.1	11.5	9.7	1.3	1.3	1.6
中１の始め	19.9	★27.3	17.8	21.4	5.3	5.5	2.8
中１の10月ごろ	17.4	23.1	20.6	★23.2	7.0	5.5	3.2
中２の始め	14.4	17.9	16.5	★28.2	10.2	8.8	4.0
中２の10月ごろ	13.2	15.0	13.2	★27.3	12.4	10.9	8.0
中３の始め	8.6	10.8	9.3	★23.4	14.0	19.7	14.2
中３の11月ごろ	7.5	9.0	9.1	18.8	13.8	19.1	★22.7

（表４）３時間以上家庭学習している割合
└→ 成績上位群の３分の１

(%)

	平日	土曜	日曜
成績上位群	33.8	43.7	65.8
成績中位群	24.9	37.4	53.9
成績下位群	15.7	25.9	38.5

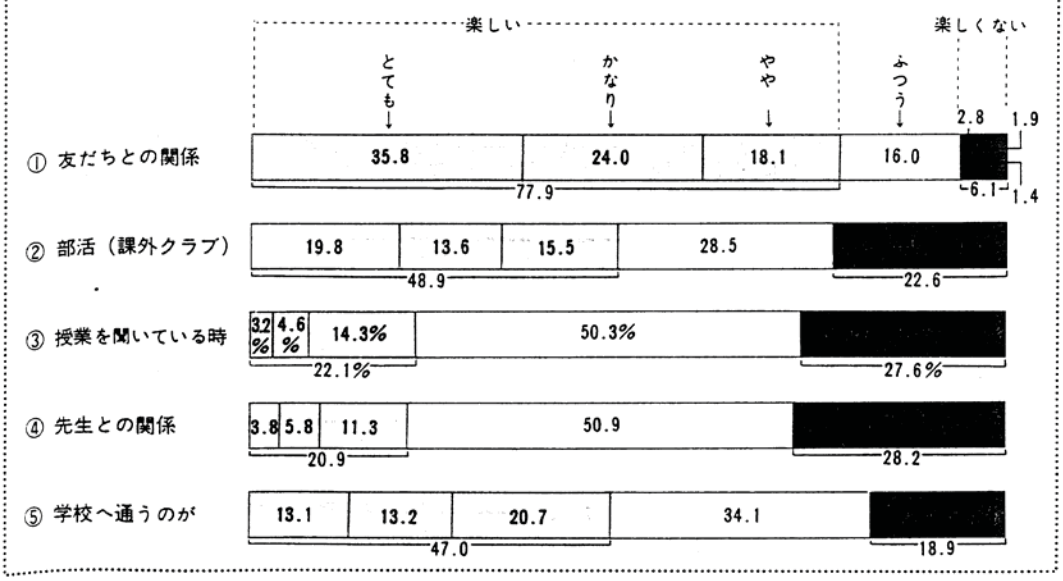
えたものなので，この通りに，生徒が勉強しているとはいいがたい。しかし，生徒たちの気持ちとしては，さすがに，この時期になると，家庭学習が１時間以内の者は１割を下回っている。

なお，勉強時間の学年別の推移を示すと，**表３**の通りとなる。表中の★印から明らかなように，小学生のころは，せいぜい１時間未満しか勉強していなかったが，中１になると，１時間程度，そして，中２は２時間と，勉強時間がのびる。そうした状況は，中３の始めまで続いているが，夏休みも終わると，さすがに４割以上の生徒が３時間以上，勉強をする生活を送っている。

そして，**表４**に示したように，中３の11月に，３時間以上勉強をしている生徒を学業成績別に集計してみると，成績上位群に，勉強時間の長い生徒が多い。そうした反面，成績が下位の者の中にも，３時間以上，勉強している生徒が16％も認められるので，どの生徒も，それなりに勉強をしているのが，２学期の後半を迎えた生徒たちの状況なのであろう。

3．学校生活

〈図4〉 今，過ごしている中学生活は
→ 楽しいのは，友だちとの語らい



楽しいのは友との語らい

今まで，家庭での生活を中心に，生徒の生活を紹介してきたので，次に，学校生活に焦点を移そう。

まず，学校へ通う楽しさを領域別に集計すると，図4の通りとなる。**楽しいのは，友との語らいと部活，そして，授業は，楽しいともいえないが**，つまらなくもないという評価である。

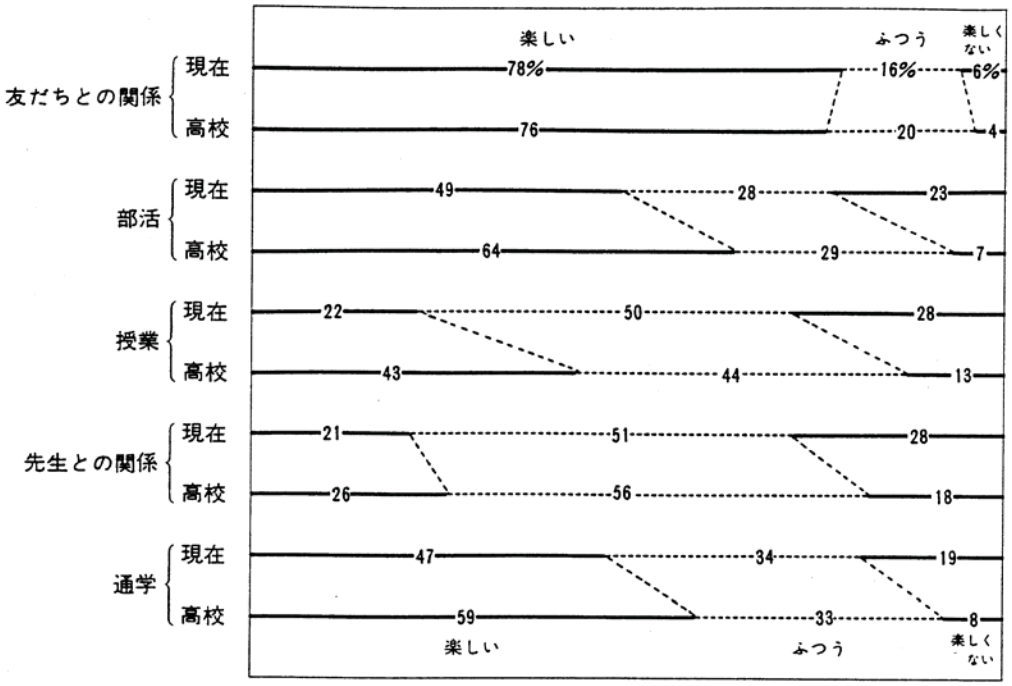
授業の時などに雑談をする生徒たちを見ていると，せめて，友と語らう時を選んで欲しいと思うことが多いが，昼休みや遊び時間ともなると，学級の中は授業中をはるかに上回るほど，かん高い話し声でいっぱいになる。

なお，こうした学校の楽しさを成績別に集計してみると，

1．友との関係……● 上位(80.2%)
　　● 中位(77.8%)
　　● 下位(77.6%)
2．部活……● 上位(52.5%)
　　● 中位(53.4%)
　　● 下位(41.0%)
3．授業……● 上位(33.5%)
　　● 中位(23.1%)
　　● 下位(16.7%)
4．先生との関係……● 上位(30.3%)
　　● 中位(20.3%)
　　● 下位(17.8%)

（「とても」～「やや」楽しいと答えた生徒の割合）

〈図5〉学校の楽しさ——高校との比較
└→高校へ入れば楽しい生活が



となる。友だちや部活動の面では，楽しさが変わることはないが，授業や教師との関連では成績が下位になるにつれて，楽しさを味わえない者の比率が高まってくる。

あと半年のがまん

もっとも，生徒たちは，苦しいのは，今のうちだけで，高校へ入学できれば，もう少し楽しい生活を始められるのではと考えている。**図5**に掲げたように，特に，部活や授業についての期待が高い。あと半年も頑張れば，のんびりできる。もう少しのしんぼうだというのが，生徒たちの心境のように思える。

事実，**表5**のように，生徒たちは「今，考えている高校に入学できたら」，「ぜったい」とはいえないまでも，希望する大学へ入り，望みの仕事につき，良い相手と結婚し，理想的な家庭を築くことが，半ば以上可能になると信じている。

つまり，この半年が，自分の人生にとっての正念場で，ここを乗り越えることができれば，明るい未来が開けるという感じを抱いている。なお，高校，そして，大学へ入ってからの生活を，生徒たちに予測させたところ，**表6**のような結果が得られた。

1．今より時間がふえるもの
　① 勉強する時間……●高校(77%)
　　●大学(72%)
　② 友と話す時間……●大学(54%)
　③ 部活……●高校(56%)
　④ 本を読む時間……●大学(50%)
2．今とあまり変わらないもの
　① 友と話す時間……●高校(49%)

(表5) 今，考えている高校に入学できたら
└→希望する道に進めるだろう

(%)

	かないそう		無理だろう	
	ぜったい	かなり	まあ	ぜったい
希望する仕事につくのが	9.6	74.0	14.5	1.9
	└83.6┘		└16.4┘	
良い家庭人となるのが	10.3	57.6	25.8	6.3
	└67.9┘		└32.1┘	
希望する大学への進学が	3.7	58.4	27.7	10.2
	└62.1┘		└37.9┘	
良い相手と結婚することが	10.0	42.2	38.1	9.7
	└52.2┘		└47.8┘	
高い収入を得ることが	5.1	49.0	41.6	4.3
	└54.1┘		└45.9┘	
社会的に尊敬される人になることが	3.1	42.3	45.1	9.5
	└45.4┘		└54.6┘	

② 本を読む時間……●高校(47%)

3．今より時間のへるもの

① テレビを見る時間…●高校(51%)
●大学(52%)

② 眠る時間……●高校(58%)
●大学(55%)

したがって，高校や大学へ入ったからといって，遊び回るわけではない。むしろ，今と同じ時間か，もう少し，よけいに，勉強しなければならないだろうという気持ちは抱いている。

それでも，今の調子で頑張り，望みの高校へ入りさえすれば，レールに乗った形での人生を送れるとの見通しである。

そうした将来への展望はともあれ，生徒たちの生活を要約すれば，ほぼ以下の通りとなろう。

〈生徒たちの生活〉

まっすぐ帰宅し，平日は3時間，土曜日はもう少し長く

勉強をして，12時ごろ眠りにつく。

睡眠時間はほぼ7時間。

学校へ行き，授業を聞く。授業はさして面白くはないが，

友だちとしゃべるのがとても楽しく，一日の中での気晴らしの時間となる。

この「3時間勉強，12時就寝，7時間睡眠」

（表6）高校や大学へ入ったら
└→今より，もう少し勉強するつもり

(%)

		ふえる			今と変わらない	へる		
		とても	かなり	やや		やや	かなり	とても
勉強する時間	高校	7.7	25.0	43.9	13.4	6.8	1.2	2.0
		76.6				10.0		
	大学	13.4	27.9	30.4	14.5	8.4	2.7	2.7
		71.7				13.8		
友と話す時間	高校	7.1	11.2	21.3	49.0	9.0	1.3	1.1
		39.6				11.4		
	大学	13.1	18.4	22.4	31.1	10.1	3.0	1.9
		53.9				15.0		
部活	高校	13.6	17.1	24.7	30.5	7.2	3.0	3.9
		55.4				14.1		
	大学	7.9	9.0	19.6	31.3	17.0	6.6	8.6
		36.5				32.2		
本を読む時間	高校	3.2	5.9	23.9	46.7	10.7	5.2	4.4
		33.0				20.3		
	大学	6.3	15.6	28.2	33.3	8.6	4.2	3.8
		50.1				16.6		
テレビを見る時間	高校	3.3	2.5	9.3	33.6	32.9	13.4	5.0
		15.1				51.3		
	大学	4.5	5.9	15.1	22.2	24.0	18.5	9.8
		25.5				52.3		
眠る時間	高校	3.3	1.8	5.6	30.9	42.8	11.5	4.1
		10.7				58.4		
	大学	4.1	3.3	8.4	28.8	33.5	15.9	6.0
		15.8				55.4		

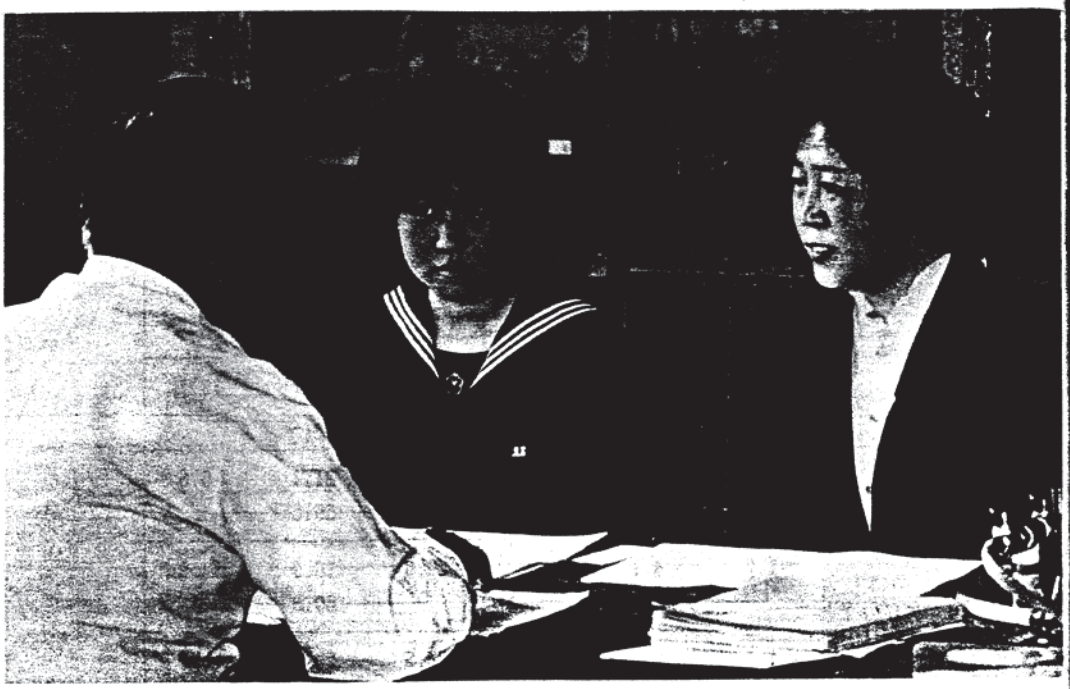
を，どう評価するのかはむずかしいところであろう。もう少し，ゆっくりとした生活を送らせたい気持ちもするが，受験を目前に控えた時期という事情を考えると，この程度はやむをえないとも思える。しかし，曲がりなりにも，多くの生徒たちは7時間の睡眠を確保しており，生活時間という意味では，うまく時間をやりくりしている印象を受ける。

そうはいうものの，これで，勉強は十分とは思っていないようで，表7の通りに，3分の2の生徒は，努力不足を感じている。机に座っていても，心が落ちつかない。能率よく勉強ができない。そうしたあせりを感じさせる数値である。しかし，生徒たちの心の内については，のちに，もう少しくわしくふれることとし，ここでは，問題を指摘するのみにとどめることにしたい。

(表7) 勉強に対する取り組み
└→ 頑張りが足りない

(%)

			頑張っていると思う			怠けていると思う		
			とても	かなり	まあ	やや	かなり	とても
全体			1.5	4.3	28.0	31.5	20.3	14.4
			33.8			66.2		
成績別	上位群	トップ	8.3	11.1	26.4	26.4	9.7	18.1
			45.8			54.2		
		上位	1.4	9.4	29.6	31.9	21.1	6.6
			40.4			59.6		
	中位群	中の上	1.7	4.1	33.4	29.0	16.9	14.9
			39.2			60.8		
		中位	1.6	2.4	31.2	34.5	20.7	9.6
			35.2			64.8		
	下位群	中の下	0.3	4.1	26.2	35.0	21.3	13.1
			30.6			69.4		
		下位	1.1	1.8	18.6	26.5	23.7	28.3
			21.5			78.5		



■第II章 ■進路選択の過程

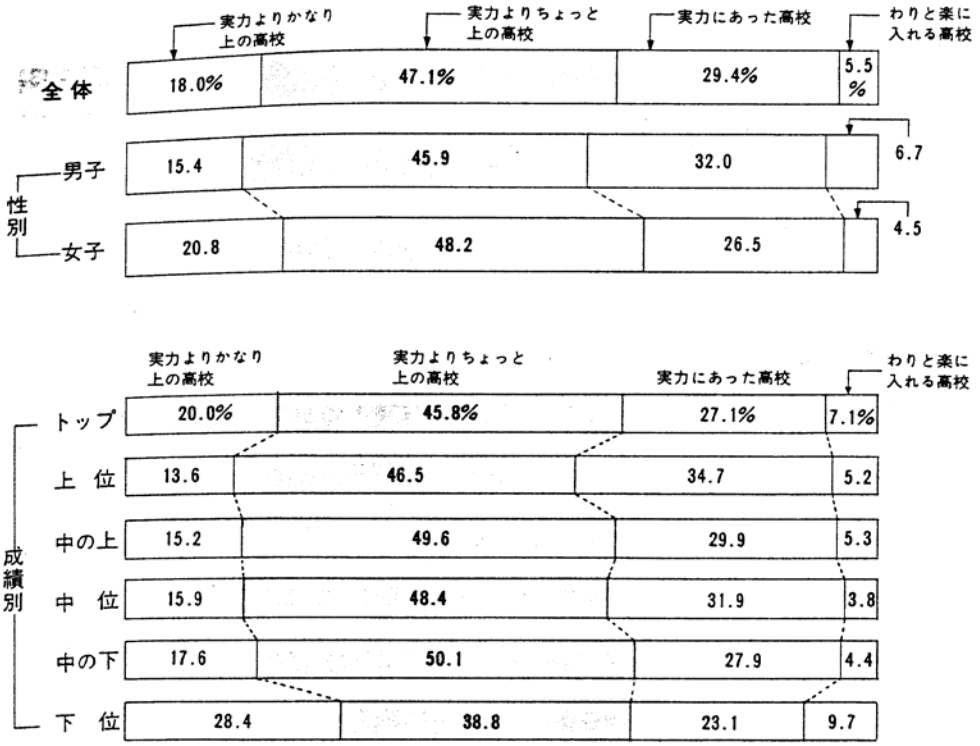
1．どの程度の高校をめざすか

実力よりちょっと上の高校へ

自分の実力より上の学力の高校に入るため，遊ぶ暇もなく塾に通って勉強する子ども，そして，その子どもに大きな期待をかける両親，その期待が子どもの心に重くのしかかっている。これが高校受験に対する世間一般のイメージであろう。

はたして，現実はそうなのだろうか。まず，生徒たちが自分の実力に対してどの程度の高校に入りたいと思っているかを調べてみよう。図6はその結果である。調査時期の11月中旬ごろは，すでにふれたように，何回かの実力検査の結果，自分の実力が大体分かってくる時期にあたる。そして自分はまだまだ力を出しきっていないから，もっと勉強すればもう少し偏差値が上がるであろうという期待を持っている時期でもある。目標の高校をしぼって，それにむけて，努力を始める時期でもある。したがって，「自分の実力よりちょっと上の高校へ入りたい」という答えが半数に達したのは，ほぼ妥当な結果とも考えられる。換言するなら今の段階で，「実力にあった高校」を受けるのでは，安全策にすぎて，夢がなさすぎるし，そうかといって，「かなり上の学校」を狙ったとしても，入れる見込みは薄い。だから，「ちょっと上」をめざすというのであろう。

〈図6〉いちばん入りたいと思っている高校は
└→ちょっと上の学校へ入りたい



ただし，この「ちょっと上」というのが，予想外にむずかしい。図中の学業成績別のクロス集計から明らかなように，成績が上位の生徒も，そして，中位の生徒も，それぞれ，「ちょっと上」をめざしている。したがって成績階層ごとに，「ちょっと上」を目標にして，受験勉強が展開されるから，受験をめぐる緊張感が，どの生徒をもとらえる計算になる。

親たちは，控えめに見守っている

なお，高校選択にあたって，親たちの高望みが子どもの重荷になるといわれることが多い。

しかし，生徒たちによると，

親の願いと子の希望

	親の願い (A)	子の希望 (B)	(A)−(B)
① 実力よりずっと上	7.2%	18.0%	−10.8%
② ちょっと上	40.2%	47.1%	−6.9%
③ 実力通り	45.5%	29.4%	16.1%
④ 期待していない	7.1%	5.5%	1.6%

の通り，少なくとも，数値の面に限るなら，**親たちは，それほど高望みをしていない**ようにみえる。

もちろん，どの親も，わが子が少しでも良

い高校へ入って欲しいという願いを抱いていよう。しかし，子どもの状況を考えると，高望みをしても，子どもを苦しめるだけだ。子どもなりに頑張っているのだから，しばらく見守ってやろう。親たちのそうした控えめな態度がうかがえるような結果である。

事実，「あなたに対するご両親の期待は，あなたの重荷になっていますか」の問いに対して，

1．とてもなっている…… 7.0%
2．かなりなっている。…26.4%　} 33.4%
3．あまりなっていない…49.6%
4．ぜんぜんなっていない…17.0%　} 66.6%

の結果が得られている。

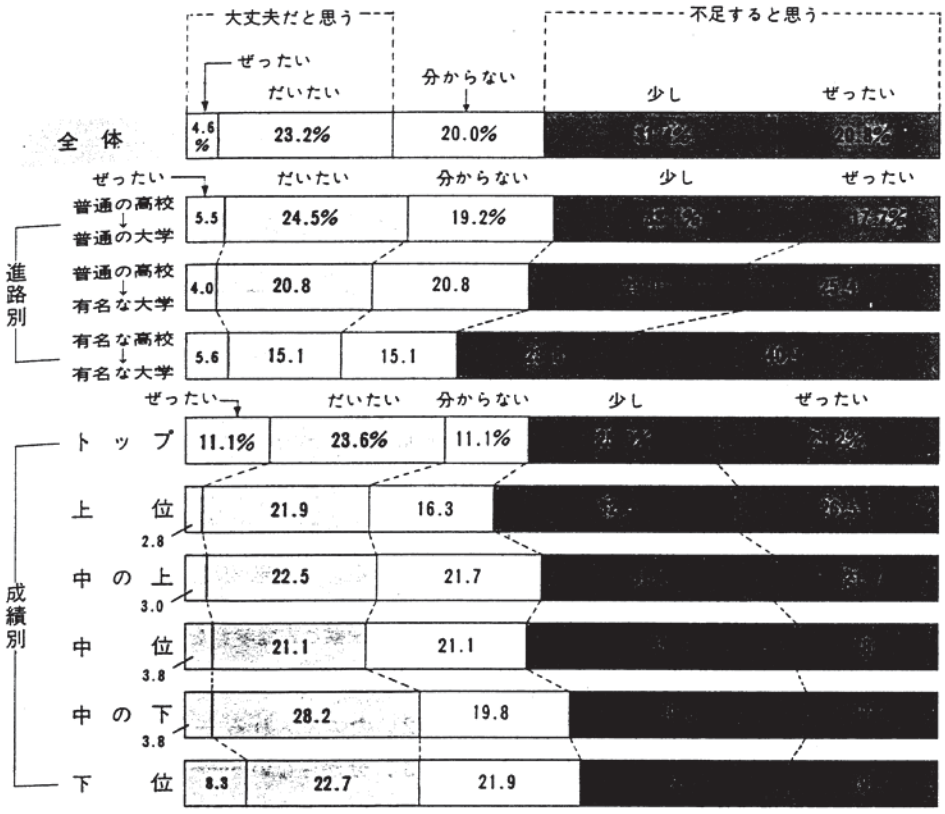
また，「あなたの家の人は，あなたの受験について，どの程度の気を配っていますか」の結果も，次の通りであった。

1．とても気を配っている…10.1%
2．かなり配っている……46.4%　} 56.5%
3．あまり配っていない…36.1%
4．ぜんぜん配っていない……7.4%　} 43.5%

もちろん，今回の結果は，サンプル数が限られているので，ここから安易な一般化を行うのは避けねばならないと思う。しかし，少なくとも，数値の上からみると，子どもを信頼し，子どもの心に負担をかけない配慮が，親たちの間に定着しているようにみえる。しかし，成績が，いまひとつ伸びないわが子にやきもきしながら，じっと，がまんしている。そんな親たちの気持ちが伝ってくるような感じのするデータでもある。

2．どの程度の勉強が必要か

〈図7〉授業だけで大丈夫か
→半数以上が駄目だと思っている



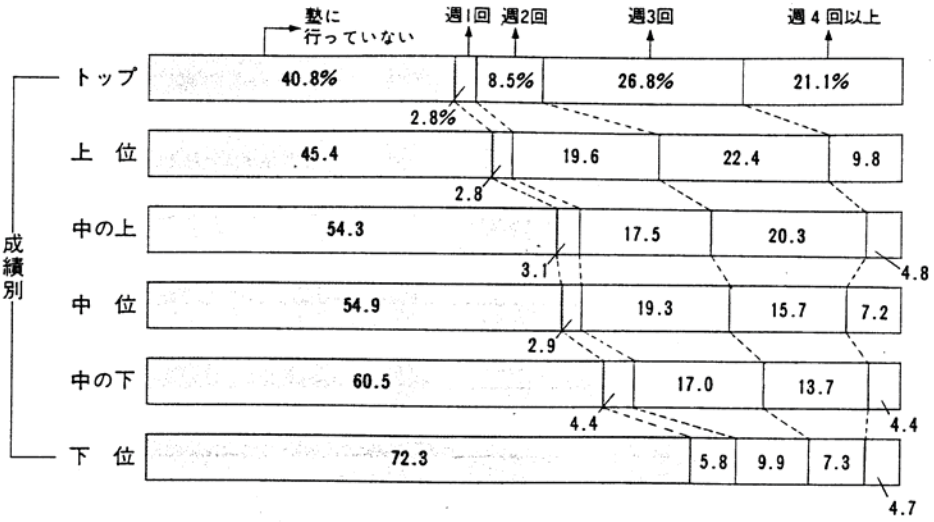
授業だけで大丈夫は3割

生徒たちが，実力より「ちょっと上」をめざして，頑張っているのが，高校進学の実態であった。

それでは，「ちょっと上」に入るために，どの程度の勉強が必要なのであろうか。「高校入試には，特別な勉強はいらない。授業をまじめに受けていれば十分に合格できる……」と，教師たちは，生徒や父母に説明することが多い。理想はその通りであっても，塾通いの実態をみれば，教師の説明は現実離れしていると思わざるをえない。そこで，生徒たちに，いくつかの設問を用いて，「授業だけで大丈夫か」をたずねてみた。

まず，図7に，「高校合格のための勉強は，学校の授業をきちんと受けていれば，家庭であまり勉強をしなくとも大丈夫だと思います

〈図8〉教科の成績からみた塾に通っている回数
└→成績の良い生徒ほど塾通い



か」の設問に対する生徒たちの反応を示した。

図から明らかなように，「授業をきちんと受けていれば大丈夫」と思っている生徒は3割弱に限られ，「ぜったい不足する」の2割を含めて，**半数以上の生徒が，授業だけでは駄目だろう，と答えている。**しかも，成績別欄が示すように，そうした見方は，有名高校をめざす一握りの生徒でなく，普通の高校へ入ろうとしている生徒も，そして，成績が振わない生徒も，つまり，生徒たちの全体に定着している。

しかし，図7の設問では，「家庭であまり勉強をしなくとも」と，家庭学習に全力を注がない状況をイメージに置いてあった。そして，すでにふれた結果は，授業だけでは駄目で，家庭学習が不可欠と，生徒たちが考えていることを示唆していた。

そこで，「それでは，学校の授業をまじめに受け，参考書などできちんと勉強すれば，塾などへ通わなくとも高校へ入れると思いますか」と，たずねてみた。授業と家庭学習をきちんとすれば，特別の手段を講じなくとも志望する高校に入れると思うかという問いかけである。その結果は，

授業と家庭学習をきちんとすれば

1．ぜったい入れる……29.1%
2．たぶん入れる……45.8%
} 74.9%
3．分からない……20.9%
4．たぶん入れない…… 2.8%
5．ぜったい入れない…… 1.4%
} 4.2%

の通りであった。「ぜったい大丈夫」とはいえないが，「たぶん大丈夫だと思う」という反応である。

塾へ行った方が有利が7割

そうはいうものの，「参考書などできちんと勉強をする」は，言うは易く行い難い。

どのようにむずかしい試験であっても，「きちんと勉強する」ことができれば，独力で突破できよう。しかし，そうできないのが，受験生の悩みである。

事実，生徒たちは，「塾へ行ったり，家庭教師についた方が進学に有利だと思いますか」の問いに対し，

1．ぜったい有利…… 7.2%
2．かなり有利……14.9%　} 67.3%
3．やや有利……★45.2%
4．あまり有利でない……21.9%
5．まったく有利でない…… 3.5%　} 25.4%
6．分からない…… 7.3%

と答えている。「とても有利」ということはないが，不利でもない。全体としては，「やや有利だと思う」という評価である。

こうした結果は，

	(ぜったい/かなり)＋(やや)＝(有利)
トップ層	37.2%＋31.4%＝68.6%
中の上層	24.1%＋42.7%＝66.8%
中位層	18.4%＋48.0%＝66.4%
下位層	22.8%＋43.0%＝65.8%

の通り，成績に関係なく，どの生徒たちからも抱かれている。

つまり，自分で頑張れば，高校受験の力はつくと思う。しかし，意志が弱いから，どうしても，怠けがちになる。だから，意志の弱さを補う手段として，塾通いや家庭教師の活用もやむをえないというところなのであろう。

生徒たちの通塾率は

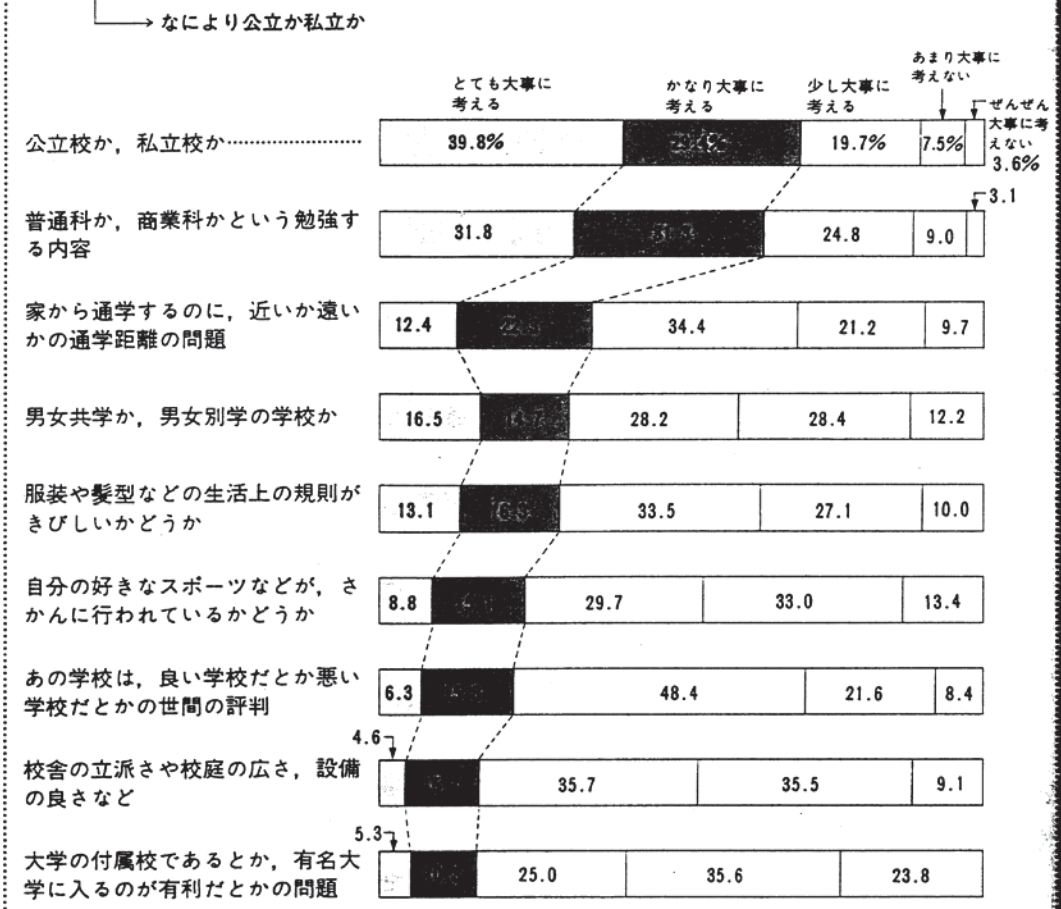
1．通っていない……59.6%
2．通っている……40.4%
　週 1回……8.5%
　　2回……38.2%
　　3回……37.9%
　　4回以上……15.4%

の通りであった。しかも，図8から明らかなように，塾通いをする生徒の割合は，学業成績がよくなるにつれて高まってくる。したがって，現象だけをつなぎ合わせると，塾通いは，学習の不足を補おうとする意欲の現れで，意欲が薄れるにつれて，通塾率が低くなる傾向が認められる。

しかし，そうはいうものの，通塾率が4割に達する状況は，どう考えても，健全といいがたい。受験に伴う不安が，こうした通塾率の高さを招いたのであろう。

3．志望校を選ぶ条件

〈図9〉高校を決めるときの条件



公立か私立か

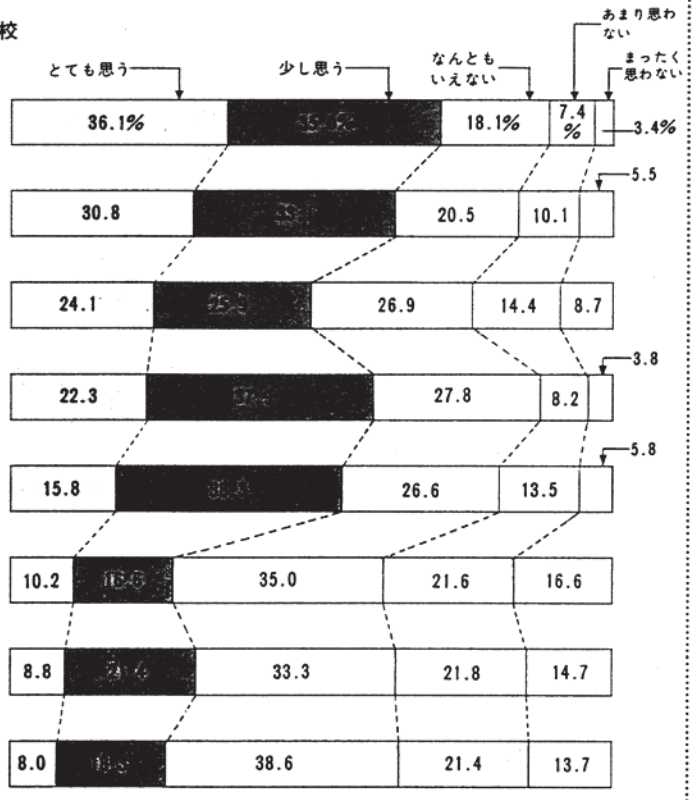
学校の勉強だけでは不十分だ。だから，家庭でも，しっかり勉強しなければ，でも，怠けがちになるから，塾でも行こうか。こうした生徒たちの心の揺れを感じさせる結果だが，そうしている内にも，具体的な志望校を決めねばならない時期が迫ってくる。

志望校を選ぶにあたって，生徒たちの心の内をよぎるのは，なんといっても，偏差値であろう。しかし，偏差値の問題は次章にゆずることとし，もう少し，一般的な形で，志望校選びの条件をたずねると，図9のような結果が得られる。

「とても」あるいは「かなり」大事に考える割合に注目して，全体をまとめると，

〈図10〉良い高校とは

→まじめな生徒の多い学校



志望校選びの条件

1．6割以上の生徒が大事に考える
　① 公立か私立か　(69%)
　② 普通科か商業科か (63%)
2．3割近くの生徒が大事に考える
　① 通学距離　(35%)
　② 共学かどうか (31%)
　③ 規則のきびしさ (29%)
3．あまり大事に考えない
　① スポーツがさかん　(24%)
　② 世間の評判　(22%)
　③ 設備の良さ　(20%)
　④ 有名校かどうか (16%)

の通りとなる。

偏差値を中心に，公立か私立か，あるいは，普通科や商業科ぐらいを，とりあえずの目安として，生徒たちが志望校を選んでいる姿が浮かんでくる。生徒たちの選べる高校は，偏差値とのからみで，さほど多くはなく，せいぜい数校以内であろう。となると，上記の基準くらいしか，考えられないのかもしれない。

なお，念のために，生徒たちに「良い高校」のイメージをたずねてみた。「良い高校」をめざして，勉強をしている。その良い高校とはどんなものなのかを聞こうとしたのである。

結果を図10に示した。生徒たちによれば，良い学校とは，

「生活がきちんとしていて，熱心に勉強する生徒が多く，入るのがむずかしく，卒業生

が良い仕事についている学校」

となる。つまり，ひとくちにいって，まじめな生徒の多い学校が「良い高校」という評価である。中学生の評価としては，堅実で，理解しやすい反応である。そうした反面，良い高校についての理解に，個性が乏しい印象を受ける，今は，とりあえず，少しでも良い高校へ入るのをめざす。その高校が，本当に良い高校かどうかは，入学してから考えようというのであろうか。